

京都府森林組合連合会 専務理事 ^{あおあい} 青合幹夫さん

「山とともに歩んで」

青合さんとは、寄附講座「協同組合論」の講師として初めてお会いした。森林の歴史から始まるお話は面白く、歴史や環境問題としても勉強させていただいた。改めて森林と人間を考えるようになり、無理をお願いしてインタビューに応じていただいた。今回お聞きした内容も興味深いものであり、以後どのように森林と向き合えばいいのかという覚悟もできたように思う。この場を借りて青合さんに感謝したい、ありがとうございました。

名和 最初に青合さんの子ども時代のことをお聞きしたいと思います。

青合 わたしは京都市上京区で生まれ、昭和30年に現在住んでいます北区に引っ越してきました。昭和20年の生まれで、子供の頃の遊び場は街なか、当時の主要な交通機関は中立売通りを走っていたチンチン電車です。近くを流れる堀川の川底は石ころだらけで、川の水は染物工場から流れ出る水で青かったり、染料のいろいろな色に染まっていたことを覚えています。また、御所にも近く、わりあい自然の中で遊ぶことが多かったと記憶しています。北区に引っ越してきて間もなく父親が亡くなったのですが、もともと父親が山歩きやスキーが好きで、わたしも父が残した登山などの写真集を見ていて影響を受けたのか、高校生のころから山歩き始めました。こういうことで、街なかには住んでいたものの自然との付き合いは結構長いということになります。



名和 京都ではかつて今西錦司さんがご活躍の頃、近辺の山を登っていたと聞いています。京都らしい登山のエピソードがあったかと思います。ところでその後、京都府立大学に進学されましたね。

『ヤマにお世話になって』

青合 京都府立大学では林学を専攻しました。その動機は単純に山が好きだからということに尽きます。

名和 一般に農業の道にすすまれる方は多いと思いますが、林業に進むというのは「少数派」ではなかったのですか？

青合 「少数派」ということもなかったですが、わたしとしては林業そのものをどうしたいということだけでなく、単純に山に接する機会が増えるとの思いが強かったのだと思います。そんなこともあり大学入学後はワンダーフォーゲル部に入部し1年に100日以上も山に入っていた年もありました。そのほとんどは京都北山など近くの山ばかりでしたが、そんな中で自然との付き合いを深めていったので、本当に『山に世話になった』という思いがあります。

名和 府立大学の歴史はおもしろいですね。歴史も古く、お隣には植物園もあります。キャンパスには立派なヒマラヤ杉があります。以前わたしは中国の桃の木を探していたことがあるんですが、京都の府立大学のキャンパスにあることがわかりお願いして写真を撮っ

たことを思い出しました。そのときも『歴史のある大学はすごい』と実感しました。府立大学をご卒業後どこに就職されましたか。

ゼミ生は全員「公務員」

青合 卒業後は京都府庁に就職しました。学生当時の主任教授が群馬県庁で試験研究をされていた先生でもあり、『卒業したら公務員になれ』といわれていまして、結局ゼミの学生は全員公務員になりました。



名和 恩師のご指導が功を奏したわけですね。

青合 現在の京都府農林水産部の林業技術吏員として採用され、最初、亀岡の府事務所配属されました。そこには林務課と治山課という部署がありまして、私は4年間治山課で森林土木系の仕事をして、その後、本庁の保安林係に転勤となり、森林の開発などを規制する側の仕事を4年間させていただきました。そこで業務の指針としての森林法を細かいところまで学ぶことになりました。

名和 そのなかで特にご苦労されたことをお聞かせいただけますか？

青合 森林を森林所有者が自ら維持管理することについては何ら問題ないわけですが、時は高度経済成長まっただ中、列島改造が叫ばれる最中で開発問題への対応が大変でした。保安林は公益上の理由がなければ解除できないことになっているわけですが、保安林以外の土地と一体的に開発を進めようとする土地利用者との軋轢が多々ありました。そうした問題では出先機関のほうがより生々しい現実対応を迫られることとなります。森林法の問題は国土保全を図るということを大きな目的としているわけで、それとの関係が常に問われていたわけです。

名和 戦中戦後に様々な自然災害が発生し多大な被害を被りましたが、わたしにはそれらが「人災」ではなかったのかとも思えるわけです。戦後の台風災害について、たとえば広島でも大きな被害が出ましたが、原爆による被災に加えて、戦争中に若者の多くが兵隊に取られて必要な治山治水がすすまなかったことが主な要因ではないかと思うわけです。

「松根油」で根こそぎに

青合 おっしゃるように戦時体制が長く続いて、木材が計画的に戦争資材として利用され、終戦間際には強制伐採まで行われました。さらに、森林荒廃の原因は燃料問題にあります。

特に、戦時中は石油に代わる燃料として、松の根から抽出する「松根油」を採取するために松の根を掘り起こす、文字通り根こそぎ伐採をして荒廃が進んでいきました。これは、当時編成された「松根油部隊」に動員されて作業に当たったという大学の先生自身の体験談からそのようなことを知りました。

名和 戦後は全国植樹祭など植林による森林復旧がはかられたようですが。

青合 昭和25年から荒廃地の復旧を目的とした全国植樹祭が始まりましたが、当時は昭和天皇自らハゲ山に植樹されていました。荒廃地復旧は20年くらい続けられたのでしょうか、人工造林による緑化が随分進みましたが、それまでは台風その他の自然災害により毎年のように水害などによって大きな被害を被っていました。

名和 森林面積そのものは現在までほとんど変わっていないそうですね。

青合 森林面積は基本的には変わっていません。課題は人工林、人工林にしてしまうと最後まで手を加えてやらないと健全に育たないということがあります。

名和 山を守る人たちの守備範囲がどんどん広がっていった反面、その人たちの人数が減っていき十分管理できなくなっていったということですね。

燃料革命がヤマを変えた

青合 人工造林が進み需給バランスもとられてきたわけですが、転換期は昭和 35 年くらいから。燃料革命が始まり、エネルギー源が薪や炭から石油に変化していきました。それまで一般家庭では風呂には薪、暖房には炭、練炭などを使っていましたが、その後、電気や石油に代わっていくとともに「山」に対する依存度が低くなり、それにつれて木材価格も低迷していきました。他方、高度経済成長時には都市での労働力が必要となり、山村から若い者が引き抜かれていき、山の管理体制が弱くなっていきました。それでも、戦後の復興需要に対応するためどんどん人工林が増えていって、現在、人工林率は全国平均で 42% になっています。

名和 森林は自然に育っていくのではなく人が管理育成していくわけですが、最近、森林従事者を育成するための施策がすすんでいますね。また京都では「モデルフォレスト」のとりくみもあるようですね。

林業大学校で後継者育成



青合 京都では 2012 年 4 月に京都府立林業大学校が開校されました。林業を支える若者を育成しようという知事の強い思い入れによるものです。西日本では初めてで、かつ京都のように林業県でなくむしろ消費県に林業大学校が作られるのはある種の冒険かもしれませんが、大学校では私達から見てもうらやましいほど素晴らしい内容の授業が用意され、さらに森林作業に必要な資格も取ることができます。全国的には長野、岐阜などに林業大学校があります。卒業生には林業事

業体に就職してほしいのですが、京都府にはもともと大規模な事業体がなく、また林業そのものも低迷している中で決して楽な道ではありませんが、彼らを大切に育てていきたいと思っています。また、京都の森林率は約 75%、森林を守り育てることは大きな課題です。

山田知事は就任直後からモデルフォレスト運動の取り組みを重視されて積極的に進められています。モデルフォレスト運動というのは、伐採された木材を地域住民が自分達の建築材料に使うなど、地域の人々が山の管理育成にかかわり、森林資源の循環利用を進めていくことを目的に始められた運動で、もともと発祥の地はカナダです。現在実施しているのは全国で京都だけですが、発足して以降かなりの企業が運動に参加しており、社員の森林体験や国産材の調度品をできるだけ使うといった取り組みが進んでいて、2012 年の総会では本格的に循環利用を促進していこうとの方針が確認されました。

名和 林業資源を地域循環していこうということですね。現在順調にすすんでいる地域をご紹介いただけますか？

良質な水源はヤマの保全から

青合 現在一番活発なところというと天王山の麓、大山崎に工場がある「サントリー」さんです。ここではウイスキーづくりのために自然水を使われていますが、良質の水を確保する必要があります。そこで、森林をきっちり管理したいという思いが取り組みにつながっています。その他、木津川流域にはサントリーの飲料品の工場があり、「天然水の森林」づくりとして、木津川市山城町をはじめとした地域で取り組みが進められており、長いお付

き合いを期待しているところです。ただ、モデルフォレスト運動は森林に対する理解を深めることはできますが、林業本体を根本から支えるものではないということも踏まえる必要があります。

名和 それでは現在の林業における中心的課題について伺います。

間伐材の丸太を使って

青合 京都府の人工林率は38%と全国平均より少し下回りますが戦後植林されたものがほとんどで、46年生が半分以上となっています。一般的に40年生くらいから利用可能と言われておりますが、用途によっても違いますけれど、それらを本格的な製材用の資源として利用するにはまだ少し中途半端な樹齢だというのが実態です。あわせて、大きな課題は木材需要の減少です。木質資源の国内利用量は、かつて年間1億 m^3 、国民一人あたり1 m^3 であったものが、現在では年間8千万 m^3 を切って、国民一人あたり0.7 m^3 となっています。おまけに現在の自給率は26%なので、ほとんど外国産の木材の利用となっています。せめて内装材にもっと国産材を使って欲しいわけですが、現状ではむしろプラスチックやアルミ材料が増加しています。

このように需要が減少していることと、材木価格が低迷していて林業経営が厳しい状態にあります。それでも山を守っていかねばならないということで、国としても税金を投入して間伐などの森林整備を進めているわけです。そして、そこで生産される間伐材をできるだけ有効利用することが必要ですが、現在一番使われているのは合板材やチップです。一方、連合会では平成12年に間伐材の利用を広げるために「丸棒加工場」をつくりました。そこで生産した丸棒を、例えば治山事業の工事現場で水路工・土留工などに活用したり、模型のような木製治山ダムに利用していますが、われわれとしてはもっと広範囲な土木資材に使っていただきたいと希望していますし、例えばベンチなどにもどんどん利用してもらえればと思っています。



〈間伐丸太材を利用したダム模型〉



名和 以前に滋賀県の琵琶湖で魚が狙上できる目的の河川工事でも同様の資材を活用している例を見ることができます。

ところで現在、外材が日本のあらゆるところで氾濫している状況ですが、国内で使われている割り箸の98%が中国製と聞いています。他方、中国政府自身は森林資源の枯渇を恐れて輸出禁止の動きに出るのではともいわれています。こうしたごきは他の輸出諸国にも広がるでしょう。

そうであっても日本国内には資源はあるわけです。

間伐材でつくった割り箸はすでに全国で使われています。実は大学生協としてこれまで何度か奈良県吉野の割箸協同組合を訪問していろいろな問題を学んできました。

青合 吉野杉でつくった割り箸は木目が通っているのできれいに割れます。これは吉野で100年200年と長い年月をかけて育てられた良質の杉の端材を使っているからです。しかし、一般的な間伐材の割り箸は、まだ育成途上の木材から作られますから、木目が通っていないこともあってきれいに割れないという問題もあります。そこをこのところを理解したうえで使ってほしいと思います。

国民意識の変化が鍵

青合 林業振興を図っていく上で、国産材を使う国民の側の意識の変化も必要だと思っています。ご承知のように林業は小規模零細経営がほとんどで、コスト構造も厳しいものがあります。中国で1円で生産できるものでも日本国内では少し高くなるざるをえないという現実を承知で使ってほしいと思います。価格競争の厳しいなかで国産材の側も価格面で頑張っていますが、結局そのしわ寄せが山元の原木価格にしわ寄せされるわけですから。敢えて申し上げたいのは、長い目で見れば国産のものを使うことが結局、日本国や自分たちのためになるんだということです。



名和 農業も同じことがいえますね。第一次産業を考える場合、問題は価格だけではないということですね。次に森林を管理する人材が少なくなっているなかで今後の森林資源の管理をどうしていかねばならないかについてお伺いします。

森林組合の役割

青合 森林を管理していく担い手は森林組合以外では難しいと思います。森林組合には長い歴史があり地域に密着して組合員の情報を持っています。その情報をもとに森林組合が課題を森林所有者に提案することによってはじめて森林を健全に保全できると思います。そのためにも提案できる能力がなければなりません。また森林所有者の山離れが問題となっていますが、こういう現状を考えますと、森林所有者と民間事業者との関係だけでは問題の打開は難しいと思います。森林組合と組合員との長い付き合いで築きあげてきた「信頼関係」を踏まえて、もっと役割を発揮すべきだと考えています。その意味で森林組合が正確な情報をつかむことが大切です。それらを進めるためには人材が必要ですし、さきほど申し上げた林業大学校で若い人たちが育ってきますから大いに期待しているところです。

もうひとつの課題は現地での技術力です。伐採や造材など現場での熟練した技術、60年とか80年を経て太く育ってきた木材に付加価値を付ける技術を持ち続けるための伝承作業が必要です。



〈丸棒材の「^{かどまつ}門松〉

名和 外材の輸入問題ですが、東南アジアその他から今後外材が入ってこなくなることは明らかではないかと思います。

青合 輸入原木丸太についてはすでに昭和38年に自由化され関税ゼロとなっています。今 TPP の問題がありますが、林業サイドではすでに無関税の状況で進んでいるわけです。2050年には世界人口が90億人ともいわれていますが、そうなればアフリカ、インド、中国での燃料用などの木材需要が大きく増加することが見込まれ、いずれ地球規模で木質資源が枯渇していくのは目に見えていると思います。

戦後日本の自給率は高くても90%程度で、実は江戸時代においても良質な広葉樹材は東南アジアから輸入されていました。自給率100%ということは考えられませんが、私が就職した昭和43年には60%でしたので、現在の自給率26%を見ると急激に自給率が低下していったこととなります。

日本の風土は湿潤温暖のお陰で再生・利用がし易いという恵まれた地理的条件があります。また歴史に学ぶという面では、鎌倉時代から江戸期にかけて急速に人口が増大してい

くなかで莫大な森林資源を消費していった結果、山が荒れていった。そのため時の為政者は、このままではいけないということで藩の最大の課題として治山や治水、河川改修に力を入れてきたことが足跡として残されています。

名和 最後に、今考えておられることをお伺いします。

協同組合どうして協力しあえること

青合 最近、農協・漁協・生協・森連という四つの協同組合が一緒になって協同組合学校を開催し、それぞれの課題や現状を学び合う機会があったのですが、その中で「山のこと」が十分理解されていないことを痛感しました。私たち自身の情報発信不足の面があらわになったということです。ホームページも開設していますが、それほどよく見られているわけではありません。そこで生協のルートをもっと大事にすべきだと考えています。例えば京都生協は50万人くらいの組合員を擁していて規模の上で大きな存在です。かつて京都生協の住宅建設に関する部署に、もっと国産材を使ってほしいとお願いしたこともありましたが、すぐには難しいというお返事をいただいた経験があります。そこで仮に京都生協の広報の紙面に、ほんの数行でも定期的に「山」に関する記事を掲載していただくだけでも大きな効果があるというようなことも考えています。

『情報発信が問題だ』と



名和 最近「村長ありき」という、岩手県沢内村に関する本を読みました。なによりも命と健康が大切だ、という内容でした。わたしは同志社大学で、生涯健康講座を担当してお医者さん、栄養学の専門家とリレー講義「学生と健康」という授業をしていましたが、摂食障害をもった学生をはじめとして多くの学生が自らの健康問題を考えるきっかけとなってようです。

夏におこなった大学生協寄付講座「協同組合論」のグループ討論で学生さんが『僕たちは協同組合のことをほとんど知らなかったことが分かった。でもこれは協同組合の側の情報発信のありかたも問題ではないか』という指摘もありました。

大学生協もホームページを開設していますが、たとえば他の協同組合の求人情報を互いにホームページに掲載し合うというようなことはすぐにもできると思います。

青合 わたしたちも協同組合どうしの「協同」をもっと活発に展開していければと思っています。同じ協同組合の関係者ではあっても山のこと、魚のこと、野菜のことをお互いによく知らないというのが現状ではないでしょうか。

名和 先日、京都生協南ブロックの組合員さんが30人くらい参加して、同志社のキャンパスで賀川豊彦についての学習会と、同志社大学のキャンパスツアーがあり、大学生協の役員と一っしょに交流することができました。さまざまな協同組合がお互いに交流し合う機会をこれからもっと増やしていきたいですね。

本日はお忙しいなか、森林と私たちの生活のありかたについて興味深いお話をいただきありがとうございました。

(2012.12.25 於・京都府森林組合連合会)